

『源氏物語』の二つの死と季節表現

高 橋 美 穂 子

序

『源氏物語』には非常に多くの人物が登場し、多彩な人生模様を描いている。それらの中でも興味深いものの一つが、人生の結末である死の描写である。物語の主要人物の死は、葬送や哀悼などを含めて詳しく語られている。そして、主要人物の死は特定の季節と結びつけて描かれていることが多い。

本稿では、それらの中から藤壺と紫の上の死を取り上げる。藤壺の死は春に、紫の上の死は秋にそれぞれ設定されている。作者が、二人の死を描く際にそれぞれの季節をなぜ選んだのかということを中心に、二人の死と季節との関係について考察したい。

第一章 藤壺の死と春

(一)

光源氏三十二歳の春、入道後の宮（藤壺）が崩御した。藤壺はこの時、女性の重い厄年である三十七歳であった。

さて、薄雲巻の藤壺の死に関する記述を見ると、その分量が非常に少ないことに驚かされる。光源氏の一生は、藤壺によって左右されたのだから、藤壺の死と彼女への哀悼には、もっと多くの筆が費やされてもよかつたはずである。このことについては、既に数多くの指摘がある。

しかし、文章の量の多少によって、そこに込められた作者の思いの深さを測ることは出来ないであろう。藤壺の死を語る文章は、短いゆえにかえって、作者の思いのすべてを物語っていると私には思

われる。

藤壺が息を引き取る様子は、『法華經』に見られる仏の入滅に나ぞらえる形で「燈などの消え入るやうにて」(薄雲・一六八頁)と表現された。后腹の皇女として生まれ、中宮・国母の位に昇り、さらに仏道に入ったゆえに、藤壺は死に際して仏に喩えられたのである。人柄も「御心はへなどの、世のためにもあまぬくあはれにおはしまして」(同・一六八頁)とあるように慈愛深かった。すべての面において並外れた女性で、仏と同格に扱われるだけの資格を備えていたのである。そして、仏に喩えられたことから、作者が藤壺の死を国母・女院の崩御として描いたことがよくわかる。光源氏にとって藤壺が最後まで手の届かぬ女性であったことも、仏の入滅になぞらえられた死の表現によって明らかである。藤壺は、中宮・国母・女院という公人としての生涯を全うし、彼女の死は、身分の上下に関係なくすべての人に悲しまれたのである。

(一)

藤壺の死は春の出来事であった。ちなみに、『源氏物語』の主要人物の多くは秋に死去している。夕顔・葵の上、六条御息所、紫の上の四人は、いずれも秋に亡くなった。

作者が死の季節として秋を多く選んだのは、『古今集』以来、秋を悲しい季節と捉えるのが通念であったからであろう。『古今集』には、例えば次のような歌が見られる。

このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり^(注)

(古今集・巻四秋歌上・よみ人しらず)

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつうつろひゆくをかぎりと思へば

(同前)

これらの歌のように、当時の人にとっての秋は、もの思いに沈む悲しい季節であり、自然が移ろい衰えてゆくゆえに悲しい季節であった。そして、悲しい季節である秋を利用して人の死の悲しみを表現したのが、『源氏物語』の作者である。秋はただでさえしじみともの悲しい季節なので、人の死と共に描くと、死の悲しみを一層深く表現することができる。秋の死の悲しみを詠んだ

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだにこひしきものを

(古今集・巻十六哀傷歌・忠岑)

という歌もある。虚構である物語の場合も、死の悲しみを表現するのに最も効果的な季節は、秋であるといえよう。

だが作者は、藤壺の死の季節として秋ではなく春を選んだ。その理由を考えたい。

藤壺の死を春と結び付けて語るのは、葬送に続く哀悼の場面である。

をさめたてまつるにも、世の中響きて、悲しと思はぬ人なし。

殿上人など、なべてひとつ色に黒みわたりて、ものの栄えなき

春の暮なり。二条の院の御前の桜を御覧じて、春の宴のをりなどおぼし出づ。「今年ばかりは」と、ひとりごちたまひて、人の見とがめつければ、御念誦堂に籠りゐたまひて、日一日

泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが、鈍色なるを、何ごとも御目とまらぬころなれど、いともあはれにおぼさる。

入り日さす峰にたなびく薄雲は

もの思ふ袖に色やまがへる

人聞かぬ所なれば、かひなし。

(薄雲・一六九頁)

以上の引用した本文の中から、問題点を二つ指摘したい。第一に問題なのが、「ものの栄えなき春の暮なり」である。梅や桜や鶯の声などに彩られる春は、本来ならば「ものの栄えある」季節であるといえよう。しかし、人の死という最大の悲しみに遭えば、誰も花や鳥を愛でるところではなくなってしまう。藤壺の死はすべての人に悲しまれ、殿上人達の喪服で周囲は黒一色に染められた。藤壺という世にまたとない女性の死によって、華やかな春も光を失ったのである。本来は華やかな季節であるだけに、かえって藤壺の死の悲しみを際立たせていることに注意しなければならない。

次に問題なのが、「花の宴のをりなどおぼし出づ」である。光源氏は自邸の庭の桜を見て、十二年前の花の宴(南殿の桜の宴)を思い出した。桐壺帝の御代に催された花の宴である。なぜ作者は、藤壺を哀悼する場面に昔の花の宴を持ち出したのであろうか。

そもそも花の宴とは、いかなる行事であったのか。花宴巻の本文を見てみよう。

きさらぎの二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ。后、春宮の御局、左右にして、まうのぼりたまふ。弘徽殿の女御、中

宮のかくておはするを、をりふしごとにやすからずおぼせど、物見にはえ過ぐしたまはで参りたまふ。日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も、こちよげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、その道のは、皆、探韻たまはりてふみつくりたまふ。宰相の中将、「春といふ文字たまはれり」と、のたまふ声さへ、例の、人に異なり。次に頭の中将、人の目移しもただならずおほゆべかめれど、いとめやすくもしてづめて、声づかひなど、もののものしくすぐれたり。さての人々は、皆、臆しがちにはなじろめる多かり。

(中略) 楽どもなどは、さらにもいはずととのへさせたまへり。やうやう入り日になるほど、春のうぐひすさへづるといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀のをり、おぼしいでられて、春宮、かざしたまはせて、切に責めのたまはするに、のがれがたくて、立ちて、のどかに、袖かへすところをひとをれ、けしきばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左の大臣、うらめしさも忘れて、涙落したまふ。「頭の中将、いづら。遅し」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今すこし過ぐして、かかることもやと心づかひやしけむ、いとおもしろければ、御衣^ぎたまはりて、いとめづらしきことに人思へり。上達部皆みだれて舞ひたまへど、夜に入りては、ことにけぢめも見えず。ふみなど講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえよみやらす、句ごとに誦じのしる。博士どもの心にもいみじう思へり。かうやうのをりに、まづこの君を光にしたまへれば、

帝もいかでかおろかにおぼされむ。中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづからおほしかへされける。

おほかたに花の姿を見ましかば

つゆも心のおかれまじや

御心のうちなりけむこと、いかで漏りにけむ。夜いたうふけてなむ、事果てける。

(花宴・四九―五一頁)

引用が長くなったが、この花の宴という行事の中心が、漢詩にも舞にも他の追隨を許さなかつた光源氏であることは言うまでもないだろう。花の宴は、光源氏がいかに素晴らしい人であるかを証明する役割を持つ。「まづこの君を光にしたまへれば」とあるように、すべてに秀でた光源氏は桐壺帝の宮廷を照らす光であつた。彼の美しい姿に、藤壺さえ密かに惹かれていたのである。

そうした花の宴は、光源氏自身にとつても相当印象に残る出来事だつたらしい。なぜなら彼は、桜の季節になるとこの行事を繰り返す思い出すのである。藤壺崩御の折だけではない。須磨退居の折と、冷泉帝の朱雀院への行幸(少女巻)の折にも、光源氏は花の宴を思い出している。

光源氏が花の宴を折に触れて思い出すのは、その頃が彼が最も輝いていた時期であるからだろう。花の宴の当時、光源氏は二十歳。若盛りである上に、父帝の庇護の下で自由気ままに振るまうことが許されており、美貌と才能を思う存分に振るまくことができた。花の宴は、そうした光源氏の華やかな青春時代のいわば象徴である。

花の宴で春鶯囀の舞と漢詩を皆に絶賛された嬉しさと誇らしさは、光源氏の心の中でいつまでも色あせることがなかった。

そして花の宴の頃、藤壺は二十五歳、中宮になったばかりで最も時めいていた時期である。その藤壺に、光源氏は叶わぬ恋心を絶えず抱いていた。花の宴が果てた後、藤壺に会う隙を窺つて後宮をうろついたほどである。光源氏の青春時代の憂いは、藤壺への恋ゆえであつた。花の宴を思い出す時、光源氏は、輝いていた藤壺と藤壺への苦しい恋をも思い出していたと考えられる。

藤壺を哀悼する光源氏が花の宴を思い出す理由も、以上に述べたことにより説明できよう。藤壺の形代である紫の上を妻にした後も、光源氏にとつて藤壺が特別な女性、憧憬の対象であることには変わりがなかつた。光源氏には、たとえ思いが叶わなくても、藤壺が生きていることがせめてもの慰めであつただろう。その藤壺がついに世を去つてしまつた。光源氏は、藤壺との最後の対面を内大臣という公の立場でしか果たせなかつた。藤壺の死をあくまでも一人の男性として悲しむ彼は、自分と藤壺が共に輝いていた花の宴の頃が、そして藤壺への叶わぬ恋に苦しんでいた青春時代が恋しくてたまらなかつたに違いない。

以上のことから、作者が藤壺の死を春に設定した最大の理由は、光源氏に花の宴を思い出させることであつたと考えられる。前に述べたように、死の悲しみを最も効果的に表現することができるのは、悲しい季節とされていた秋である。だが、十二年前の花の宴と結びつけるために、藤壺の死は春に設定されなければならなかつたので

ある。

(二)

最初に述べたように、藤壺の死と彼女への哀悼を語る文章の量は少ない。しかしそれは、光源氏と藤壺の関係を考えれば当然のことであろう。藤壺は、光源氏の妻でなければ世間に知られた恋人でもない。彼女は国母・女院という公の地位にあり、光源氏の手の届かない雲の上の女性であった。藤壺の死は「入道後の宮」の崩御であり、光源氏は内大臣として藤壺と最後の対面をした。一人の男性として藤壺を慕う気持ちは、決して表に出すことが出来なかったし、表に出せない以上、物語がそれを詳細に語ることもない。

しかし、光源氏が主人公である以上、彼が藤壺の死を悲しむ姿はどうしても描かれる必要があった。しかも、光源氏にとって永遠に憧れの女性であった藤壺への哀悼であるから、その描写は感動的なものでなければならなかった。

そこで作者は、春の季節感を生かした哀悼の場を光源氏に与えた。自邸である二条院の桜を見た光源氏は、十二年前の花の宴を思い出し、さらに「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」という歌を口ずさんだ。そして彼は、人目を避けて念誦堂に籠り、一日中泣き暮らした。人目の無い念誦堂で彼が哀悼したのは、国母・女院ではない一人の女性としての藤壺であっただろう。いつしか夕暮となり、明るい春の夕日がさしている山の峰に、鈍色の雲が棚引

いているのが見えた。悲しみに沈む光源氏には、その雲の色が喪服の色のように思われ、とりわけ心に沁みるのであった。

以上のように、藤壺の死に関する記述の中で季節の描写が集中しているのは、光源氏が密かに藤壺を哀悼する場面である。作者が藤壺の死を春に設定したのは、藤壺自身のためというよりも、彼女の死を悲しむ光源氏のためであるといえよう。

第二章 紫の上の死と秋

(一)

紫の上は、六条院で催された女楽（若菜下巻）の直後に発病して以来、ずっと病いがちの日々を送っていた。発病から四年後の秋、彼女はついに世を去った。四十三歳であった。

紫の上の死について論じる前に、彼女が発病するまでの経過を簡単に振り返っておくことにする。紫の上が死に至った病の原因が、女三の宮の降嫁がもたらした苦悩であることは言うまでもない。実家の後ろ櫓も子供も無く、光源氏の愛情だけにすがって生きてきた紫の上にとって、内親王という身分でしかも年若い正夫人の出現はこの上なく大きな痛手であった。紫の上は、唯一の拠り所である光源氏の愛情の頼み難さを思い知らされ、人生に絶望した。この精神的な苦しみは、紫の上の健康をむしばんだのである。

ただし、紫の上が発病したのは、女三の宮が降嫁してから数年後

のことであつた。女三の宮が来た当初から、紫の上は悲しみを堪え、六条院に波風が立たないよう気を配り続けた。女三の宮との対面を自ら希望し、親しく交際をするほどであつた。紫の上の努力と忍耐のお蔭で六条院は安定し、平穩無事な日々が過ぎた。また光源氏は、幼稚な人柄の女三の宮に満足できず、立派な態度を崩さない紫の上をそれまで以上に深く愛するようになった。女三の宮は、帝に後押しされ世間の人々にも大事にされていたが、光源氏の愛情では紫の上に引けを取っていた。

そして、日々の生活が平穩無事であつただけではなく、この時期の六条院には、喜ばしい事が色々と起こつた。まず、光源氏の四十の賀が、ゆかりある人々によつて盛大に行われた。明石の女御が第一皇子を出産し、その皇子はやがて東宮位についた。女御はさらに多くの御子に恵まれ、帝の寵愛を誰よりも受け、近い将来の立后は確実と思われた。明石の女御腹の皇子の立坊が叶えられたので、光源氏はお礼参りとして住吉神社に詣でた。紫の上、明石の女御、明石の御方、明石の尼君も同行し、盛大な参詣となつた。これらのめでたい出来事を見る限り、六条院の安定と光源氏一族の栄華はますます揺るぎないように思われるのである。

だが、矛盾の上に成り立つた幸福がいつまでも続くことはなかつた。帝の配慮により女三の宮が二品に昇格し、内親王としてますます世間から重んじられるようになる、紫の上は我が身の行く末に不安を抱くようになった。

対の上、かく年月に添へて、かたがたにまさりたまふ御おぼえ

に、わが身はただ一所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積りなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を見果てぬさきに、心と背きにしがなと、たゆみなくおぼしわたれど、さかしきやうにやおぼさむとつつまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。

〔若菜下・一六一―一六二頁〕

若くて身分が高いという点で、女三の宮は紫の上よりも優位に立っていた。紫の上がどんなに努力しても、このことだけではどうしようもない。年老いて光源氏に見捨てられる前に出家したいと思うけれども、言い出せず、黙つて耐える紫の上であつた。光源氏も、帝に後押しされている二品内親王を疎略に扱ふことは出来ない、女三の宮の許に泊まる回数が紫の上と「やうやうひとしきやうに」〔若菜下・一六二頁〕なつていった。紫の上は、光源氏が訪れない夜は、女一の宮（明石の女御腹）の世話をする事で退屈を紛らわすようになった。紫の上にとつて、光源氏との夫婦生活は、もはや安住の地ではなくなつたのである。

そして、光源氏四十七歳の正月二十日頃、六条院で女樂が催されたが、次の日の明け方、紫の上はついに発病した。この時、光源氏は女三の宮の許に泊まつていた。

対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによるかたありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、

げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてや止みなむとすらむ、あぢきなくもあるかな、など思ひ続けて、夜ふけて大殿籠りぬる暁がたより、御胸をなやみたまふ。人々見たてまつりあつかひて、「御消息聞こえさせむ」と聞こゆるを、「いと便ないこと」と制したまひて、堪へがたきをおさへて明かしたまひつ。御身もぬるみて、御こちもいとあしけれど、院もとみにわたりたまはぬほど、かくなむとも聞こえず。

(若菜下・一九四―一九五頁)

紫の上は、長い年月を光源氏と共に過ごしてきながら彼の正妻ではない我が身を嘆いた。光源氏の寵愛を誰よりも受けたことで、人並みすぐれた幸運にも恵まれたけれど、結局は、一夫多妻であるゆえの女の苦しみから一生逃れることが出来ないのだろうか。なんとつまらない一生なのだろう。そう思い続けるうちに、紫の上は発病した。女三の宮の降嫁から既に七年が経過していた。

女三の宮の降嫁以来、心労を重ねてきた紫の上は、七年後のこの時になつて、本当に人生に絶望したと考えられる。光源氏の妻の一人として生き続ける限り、この先も心の平安はないのだと悟った途端、それまでの心身の疲れが一気に出て、発病したのである。

紫の上の病状は好転せず、四月には六条御息所の死霊のため一時絶息した。蘇生した紫の上は五戒を受け、六月に入つてようやく小康を得た。だが、全快することはなく、以後紫の上は、病がちの日々を送るようになった。

紫の上の発病後、柏木と女三の宮の密通、女三の宮の懷妊、出産、出家、柏木の死、と物語は思わぬ方向へ展開する。これらの出来事を描く若菜下巻の後半と柏木巻、そして横笛、鈴虫、夕霧の各巻を通して、紫の上が物語の正面に現われることはほとんどないが、その間も紫の上は病いがちで、徐々に衰弱していったのである。夕霧と落葉の宮の恋の顛末を語る夕霧巻が閉じられ、御法巻の扉が開けられると、そこには回復の見込みがなく死へ向かい始める紫の上が描かれている。

(二)

御法巻は紫の上の死を語るために設けられた巻である。光源氏の生涯の伴侶であつた紫の上の死が、この巻全体を用いて丁寧に描かれている。ここからは、紫の上の死と季節との関係に焦点を絞つて考察を進める。

紫の上の死は秋の出来事であるが、御法巻の季節の流れは春から始まる。穏やかな春の一日、紫の上は法華經千部の供養会を行った。紫の上にとつて見納めとなつた春の光景は、極楽浄土を思わせるほど美しかった。また紫の上は、法会に集まつた人々と会うのもこれが最後かと思ひ、明石の御方と花散里に別れを告げる歌を贈つた。

季節の進行に伴つて紫の上は衰弱し、夏には暑さのため意識を失いそうになることがしばしばあつた。明石の中宮がお見舞のため二条院に退出し、紫の上は中宮にさりげなく遺言した。紫の上はさら

に、紅梅と桜を明石の中宮腹の三の宮（後の匂宮）に託した。死後への準備を着々と進める紫の上であつた。

夏の暑さに堪えかねていた紫の上に、ようやく秋が訪れた。涼しくなつて気分も少しは良くなるようであつたが、やはり病状は一進一退であつた。秋が深まり草木に露が置く頃になると、紫の上は涙で袖を濡らすことが多くなつた。愛しい人達に先立つ悲しみゆえである。紫の上の死はすぐそこに迫つていた。

(三)

紫の上は、庭の萩に置いた露を見て歌を詠み、光源氏と明石の中宮が唱和した。その後紫の上は、中宮に手を取られて息を引き取つた。源氏物語絵巻にも描かれた名場面である。全文を引用して考察したい。

風すごく吹き出でたる夕暮に、前栽見たまふとて、脇息によりゐたまへるを、院わたりて見たてまつりたまひて、「今日は、いとよく起きゐたまふめるは。この御前にては、こよなく御心もはれはれしげなめりかし」と聞こえたまふ。かばかりの隙あるをも、いとうれしと思ひきこえたまへる御けしきを見たまふも、心苦しく、つひにいかにおほし騒がむ、と思ふに、あはれなれば、

おくに見るほどぞはかなきともすれば

風に乱るる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

ややもせば消えをあらそふ露の世に

とて、御涙を払ひあへたまはず。宮、秋風にしばしとまらぬ露の世を

たれか草葉のうへとのみ見む

と聞こえかはしたまふ御容貌ども、あらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがな、とおぼさるれど、心にかなはぬことなれば、かけとめむかたなきぞ悲しかりける。「今はわたらせたまひね。乱りごちいと苦しくなりはべりぬ。いふかひなくなりけるほどといひながら、いとなめげにはべりや」とて、御几帳引き寄せて臥したまへるさまの、常よりもいとたのもしげなく見えたまへば、いかにおぼさるるにかとて、宮は、御手をとらへたてまつりて、泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露のこころして、限りに見えたまへば、御誦經の使ども、数も知らず立ち騒ぎたり。さきざきも、かくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御ものけと疑ひたまひて、夜一夜さまざまのことをし尽くさせたまへど、かひもなく、明け果つるほどに消え果てたまひぬ。

（御法・一一一〜一一三頁）

紫の上の辞世の歌は、光源氏と明石の中宮との唱和の形になつてゐるが、ここでは紫の上の歌のみを問題とする。紫の上の歌は、は

かない自分の命を庭の萩に置いた露に喩えたものである。この歌を詠んだ後、紫の上は、「まことに消えゆく露のこころ」で「明け果つるほどに消え果て」た。つまり、紫の上の辞世の歌に詠み込まれた露が、そのまま彼女の死の表現に用いられたのである。

だから、紫の上の死が「消えゆく露」と表現された理由を考えるには、まず彼女の辞世の歌に注目しなければならない。紫の上が死に臨んで、自分の命を露に喩えた歌を詠んだのはなぜであろうか。

それは、晩年の紫の上が、自分の命のはかなさを実感しつつ生きていたからと考えられる。なぜなら、紫の上が露の歌を詠んだのも一つの場面が若菜下巻に存在するのである。六条御息所の死霊のため一旦息絶えた紫の上は、蘇生し、六月に入つてようやく小康を得た。気分の良い折を見て洗髪をした紫の上は、庭を眺めて、よく今まで生き長らえたものだと思つた。そこに光源氏が訪れ、「池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、露きらきらと玉のやうに見えわたる」(若菜下・二二五頁)のを見るように、紫の上にすすめた。その時紫の上は、「消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを」(同・二二五～二二六頁)と詠んだ。紫の上はこの歌でも自分の命を露に喩えている。仮死状態から奇跡的に取り留めた命を、「蓮の露」のようににはかないものと実感する紫の上であつた。

そして、紫の上の病は結局回復せず、彼女はその後四年余りを病いがちのまま生きた。「年月重なれば、たのもしげなく、いとどあえかになりまさりたまへる」(御法・一〇二頁)とあるように、紫

の上は年月とともに弱つていった。その間彼女は、いつ絶えるかもわからない命を見つめながら生きていたであらう。病を得てから死までの間、紫の上はいつも命のはかなさを体で感じながら生きてきたに違いない。そのような晩年を生きたゆえに、紫の上は死の直前に再び自分の命を露に喩えた歌を詠んだのである。そして作者は、人生に絶望した挙句に大病にかかるという苦悩の晩年を生きた紫の上に、露が消えるような安らかな死を用意したのである。

(四)

そして、紫の上の死の表現は、季節が秋であることと大いに関係がある。作者は、紫の上の死を「消えゆく露」と表現するために秋に設定したと考えられるのである。

『源氏物語』には露に関する語が多く見られる。その露は秋の風物として用いられている場合が多いが、露のように秋の風物と限定されているわけではなく、春や夏の露も描かれている。^(注2)

しかし、紫の上の死を表現する露は、やはり秋の露でなければならなかったと考えられる。なぜなら、紫の上の辞世の歌に詠み込まれたのが「風に乱るる萩のうは露」だからである。この歌の露は、前述したように紫の上の命の比喩である。紫の上の命はまさに風前の灯なのであるから、草木の葉にただ置いているだけの露では、比喩としての力が弱い。やはり露を吹き飛ばす風が必要なのである。その風としてふさわしいのは秋風である。『源氏物語』に描かれて

いる露は春・夏・秋のものであるが、風に乱れ散る露という光景が見られるのは秋だけである。文学の素材になる風は、主に春風と秋風であるが、春風に乱れ散る露の例は、三代集の和歌にも見当たらない。

白露に風の吹敷く秋のはつらぬきとめぬ玉ぞちりける

(後撰集・卷六秋中・文屋朝康)

という歌のように、風に乱れ散る露は代表的な秋の光景なのである。

また、露と結び付いている萩にも注目すべきである。露と萩の組み合わせは『万葉集』以来の類型^(注3)であり、平安時代の和歌・散文にもしばしば見られる。『源氏物語』の作者も、紫の上に辞世の歌を

詠ませるに当たり、露と萩の組み合わせをすぐに思いついたであろう。さらに、紫の上の歌において露と結び付く植物が萩であるのは、萩と結び付く露はこぼれるものとして表現される場合が多いからと考えられる。萩の上にこぼれるばかりに置く露や、萩の枝がしなうほどに多く置く露は、次のように多くの用例がある。

をりて見ばおちぞしぬべき秋はぎの枝もたわにおけるしらつゆ
(古今集・卷四秋歌上・よみ人しららず)

秋はぎの枝もとををになり行くは白露おもくおけばなりけり

(後撰集・卷六秋中・よみ人しららず)

うつろはむ事だに惜しき秋萩ををれぬばかりもおける露かな

(拾遺集・卷三秋・伊勢)

少し日たけぬれば、萩などのいと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへあがりたるも、

いみじうをかし、といひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。^(注5) (枕草子)

このように、萩の上にこぼれるほど多く置く露は、文学の素材として定着していたし、それは当然、『源氏物語』の作者が秋にいつも目にしていた実景でもあるだろう。作者は、紫の上の命の比喻として「萩のうは露」という表現をどうしても用いたかったに違いない。露はもともと消えやすいが、こぼれ落ちればなおさら、一瞬にして消えてしまう。だから、萩の上のこぼれそうな露は、今にも絶えそうな命の比喻として最適なのである。

しかも、臨終の紫の上が見て歌に詠んだのは、秋風に乱れ散る萩の上露であった。たつぷりと置いてただでさえこぼれやすい露に、強い秋風が吹き付ければ一たまりもない。紫の上の命のはかなさは、「風に乱るる萩のうは露」という表現によって最大限に強調されており、他の表現には置き換え難いのである。作者が紫の上の死を秋に設定したのは、紫の上に「風に乱るる萩のうは露」の歌を詠ませ、それを受けて彼女の死を「まことに消えゆく露のこちして」「消え果てたまひぬ」と表現するためであった。

(五)

紫の上の死が秋に設定された理由は他にも考えられる。それを以下で述べる。

登場人物が息を引き取った後には、言うまでもなく葬送と哀悼の

描写が続く。紫の上の葬送は亡くなった当日に行われた。八月十四日のことであつた。

やがてその日、とかくをさめたてまつる。限りありけることなれば、骸を見つともえ過ぐしたまふまじかりけるぞ、心憂き世の中なりける。はるばると広き野の、所もなく立ち込みて、限りなくいかめしき作法なれど、いとはかなき煙にて、はかなくのぼりたまひぬるも、例のことなれどあへなくいみじ。(中略)

昔、大將の君の御母君亡せたまへりし時の暁を思ひ出づるにも、かれはなほもののおぼえけるにや、月の顔の明らかにおぼえしを、今宵はただくれまどひたまへり。十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。(御法・一一七―一一八頁)

紫の上の火葬が行われた野原で、光源氏は約三十年前の葵の上の葬送を思い出した。このことは重要である。紫の上の死に際して、葵の上の死はどうしても思い出されなければならなかつたと考えられるのである。そのことを裏付けるように、致仕の大臣(葵の上の兄で、昔の頭の中將)も葵の上の死を思い出し、光源氏に弔問の文をよこした。二人の交わした歌のみを引いておく。

(致仕の大臣)

いにしへの秋さへ今のこちして

濡れにし袖に露ぞおきそふ

御返し、

(光源氏)

露けさはむかし今とおもほえず

おほかた秋の夜こそつらけれ

(御法・一二一―一二二頁)

光源氏の最初の妻であつた葵の上が秋に亡くなり、長い年月を経て、やはり光源氏の妻である紫の上が同じ秋に亡くなるのは、作者の意図であろう。紫の上が光源氏と新枕を交わしたのは、葵の上の四十九日の喪を終えて間もない頃であつた。つまり、葵の上の死から紫の上の死までの年月は、そのまま光源氏と紫の上が夫婦として暮らした時間なのである。よつて、紫の上の死に際して葵の上の死が思い出されることは、紫の上が光源氏の妻として生きた年月を前面に押し出すことになると考えられる。

また、光源氏の立場から見れば、彼は若い時に最初の妻に先立たれたが、その一方で紫の上を妻にする喜びを得たのである。紫の上と彼は、三十年余りにも及ぶ歳月を共に生きてきた。その紫の上にまで、とうとう先立たれてしまった。しかも、季節は葵の上の時と同じ秋である。光源氏は、妻を二人も失つた不運を痛感し、大切な人との死別に遭うことの多い人生を改めて悲しく思つたであろう。さらに彼は、葵の上の死から今までの、紫の上と暮らした歳月の重さをかみしめたであろう。彼が経験してきた多くの死別の中でも最大の悲しみなのが、晩年の紫の上との死別であつた。以上のことから、紫の上の死は、葵の上の死と同じ秋に設定される必要があつたと考えられるのである。

結 び

本稿では、藤壺と紫の上のそれぞれの死と季節との関係について考察した。そして、当然のことであるが、一口に死と季節の関係といっても、藤壺と紫の上とは、そのあり方がかなり違っていた。結局、死がどのように描かれるかは、その人物が物語の中でどのように生きたかによって決まるといえる。

藤壺は、光源氏の叶わぬ恋の対象であつたけれども、物語に描かれた彼女の実像は、国母や女院といった公人の色彩が濃いと思われる。そのため、藤壺の死は「入道後の宮」の崩御として仏入滅になぞらえる形で描かれた。そして藤壺を慕う光源氏の私的な感情を吐露する手段として、春の季節感に彩られた密かな哀悼の場が設けられた。光源氏による藤壺の哀悼は、人目を忍ぶものであるため、その描写の分量が少ない。けれども、光源氏の独詠歌「入り日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる」は巻名「薄雲」の由来であるし、この巻の藤壺は「薄雲の女院」と呼び慣わされている。このことから、藤壺の死と哀悼の描写は、分量が少なくても後世の読者の心に響くものであるといえよう。

紫の上は光源氏の妻として生涯を過ごした女性である。長い年月にわたって物語に登場する彼女は、行動・心理・容貌などの描写の量が多い。そのため彼女の死も、御法巻全体を用いて詳しく描かれた。

御法巻は紫の上が亡くなる年の春から始まり、季節の進行と並行

する形で、死へ向かう紫の上が描かれる。紫の上は秋に亡くなり、彼女が息を引き取る様子は「消えゆく露」という季節・自然の景物に喩えられた。他の人物の死と比較した場合、これはかなり特殊な表現であるといえよう。死者の周辺や哀悼の場面に季節・自然の景物が見られるだけではなく、死者自身が季節・自然の景物と同一化されているのである。このような死の描き方をされたのは、『源氏物語』の正篇では紫の上ただ一人である。（続篇の宇治の大君の死は、草木が枯れるのに喩えられた。）作者は、女主人公として紫の上を重んじ、彼女の死に独自の意味を持たせようとしたのであろう。

また、紫の上の死は、同じく秋の出来事である葵の上の死と重ね合わされていることにより、物語の中を流れた時間の重さを感じさせる。『源氏物語』の正篇に描かれた最後の死である紫の上の死は、正篇における死の総決算であり、それまでに描かれてきた死の悲しみ、特に秋の死の悲しみを総括するものであるといえよう。

『源氏物語』の本文の引用は、新潮日本古典集成（新潮社）を用いた。

（注1）和歌の引用はすべて『新編国歌大観』（角川書店）によった。

（注2）森岡常夫氏『源氏物語の考究』（二一〇頁）

（注3）小町谷照彦氏校注『新日本古典文学大系 拾遺和歌集』

（五三頁・脚注）

（注4）上坂信男氏『源氏物語——その心象序説』（六一頁）

(注5) 増田繁夫氏校注『枕草子』(和泉書院)

本稿を成すにあたり御指導を賜わりました西木忠一先生に、篤く御礼申し上げます。